

自然科学と良心

— 科学者の良心が問われる時代の中で —

近年、研究者の不正行為が社会的な関心を引いたり、また、民生用と軍事用の両方に利用可能なデュアルユースの科学研究の是非が問われてきました。自然科学の発展、その技術的な応用は、人類社会に大きな貢献をしてきた一方、人体実験・優生思想や原子爆弾の開発に代表されるように、人の生存を著しく脅かした歴史も有しています。必ずしも価値中立的ではあり得ない科学研究の今後を「科学者の良心」の視点から展望します。

● 日時：2017年 **6月6日** (火) 16:40 — 18:40

● 場所：同志社大学 京田辺キャンパス ことば 言館 チャペル

● 講演：

林田 明 (同志社大学 理工学部 教授)

貫名信行 (同 脳科学研究科 教授)



司会：小原 克博 (同志社大学 神学部 教授、良心学研究センター長)

コメンテーター：

武藤 崇 (同志社大学 心理学部 教授)

廣安 知之 (同志社大学 生命医科学部 教授)

■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター

CONSCIENCE

E-mail: rc-csc@mail.doshisha.ac.jp <http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

良心を世界に—良心を覚醒させる知の連携と知の実践 良心学研究センターは、現代世界における「良心」を考察し、その応用可能性・実践可能性を探求することを通じて、学際的な研究領域として「良心学」を構築し、さらにその成果を国内外に発信し、新たな学術コミュニティを形成することを目的としています。

講師略歴

■林田 明 (はやしだ・あきら)

同志社大学理工学部環境システム学科教授。理工学部長・理工学研究科長。博士課程教育リーダーディング・プログラム「グローバル・リソース・マネジメント」アシスタント・プログラム・コーディネーター。京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。理学博士。研究分野は地球システム科学、古地磁気学・岩石磁気学。岩石や地層に記録された過去の地球磁場の復元とそれを利用した年代推定および地殻変動・環境変動の解析。特に最近は、深海底や湖底、陸上の堆積物の磁気特性を指標として、東アジアや中米の気候変動の復元と人間活動の影響の検出を目指す研究を進めている。

■貫名信行 (ぬきな・のぶゆき)

同志社大学大学院脳科学研究科 認知記憶加齢研究部門・教授

1977年 東京大学医学部医学科卒業

1979年 東京大学医学部神経内科入局、

アルツハイマー病病理、神経原線維変化の生化学的研究。

1997年より理化学研究所脳科学総合研究センター・グループディレクター

構造神経病理研究チーム・チームリーダー

ポリグルタミン病の病態・治療研究。

2012年10月 順天堂大学神経変性疾患病態治療探索講座客員教授

2015年4月 同志社大学現職

専門は病態脳科学・神経内科。認知症・神経変性疾患の病態に基づく治療開発を目指している。

良心学研究センター主催 公開シンポジウムのご案内

■7月28日(金) 16:40 - 18:40、同志社大学 今出川キャンパス 同志社礼拝堂

「人間の発達と良心」(同志社大学 赤ちゃん学研究センターと共催)

講師：小原克博(同志社大学・神学部・教授)、中村信博(同志社女子大学・学芸学部情報メディア学科・教授)、山竹伸二(著述家・哲学者、大阪経済法科大学・客員研究員)、板倉昭二(京都大学・心理学研究科・教授)

※良心学研究センターが主催した過去のシンポジウムの配付資料や動画は、すべてウェブサイト(<http://ryoshin.doshisha.ac.jp>)やYouTubeで公開されています。ぜひ、ご覧ください。

進化論の展開と良心の系譜

林田 明 (同志社大学理工学部 教授)

研究費の不正使用や研究活動上の不正行為など、科学者の良心が問われる機会が増えている。科学技術の軍事利用やデュアルユースへの対処も研究者の社会的責任の一つである。このような状況は、科学と技術の発展と一体化に伴い、個人としての知的営みとしての研究活動が社会からの信頼と負託の上に成立する事業へと変貌することによって顕著になったといえる。一方、自然科学の歴史において、旧来の自然観の転換や常識を覆す発見が社会に大きな衝撃を与え、その時代の倫理観を変貌させるという事例も存在する。

本講演では、18世紀から19世紀にかけての自然観の変化、すなわち自然神学の枠組みから近代科学としての地質学への移行、それに続く進化論の登場と社会に与えた影響について考えたい。神によって巧妙にデザインされたと信じられていた生物の構造や機能に関して、チャールズ・ダーウィンは、種の中の個体変異と生存競争、自然淘汰という現象によって種の起源と多様性が説明できると唱えた。ヒトを含む生物の進化に神の意志が不要であるという主張は、現代の我々にとって疑問の余地のないものであろう。しかし、たとえばアメリカ独立宣言の「全ての人間は平等につくられている」という一文は、人が神によって創造され、生命・自由・幸福の追求という権利も神から与えられたことを前提としており、ダーウィンの進化論はこれを揺るがすことになった。

ダーウィン自身は、『種の起源』に続いて『人間の由来』を著し、高等動物には仲間との交流や同情を生む社会的本能が備わっていて、それが人間の道徳性につながる可能性を示そうとした。その一方で、進化論の考え方は人種や民族間に優劣が存在するという発想に結びつき、チャールズ・ダーウィンのいところであるフランシス・ゴルトンによる優生学 (eugenics) の提唱とその発展を導くことになる。

- 1) 新島襄の「地質構造図」：激変説と斉一説
- 2) ダーウィンの進化論：『種の起源』と『人間の由来』
- 3) ダーウィンのいところ：フランシス・ゴルトンの優生学
- 4) 道徳性の起源：霊長類の共感能力と利他性

関連する講演会のご案内

公開講演会「新島襄の地球」(※聴講無料、事前申込不要)

2017年7月1日(土) 13時～、明德館1番教室 (同志社大学今出川キャンパス)

講師：林田 明 (同志社大学理工学部教授)

問合せ先：ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室 TEL: 075-251-2716

自然科学と良心

貫名信行 (同志社大学大学院 脳科学研究科 教授)

- 1) Aktion T4 との出会い。
Hallervorden-Spatz 病は使うな、の意味すること。
サンプルの由来を問わないでいいのか。
 - ・ ETV 特集「それはホロコーストの"リハーサル"だった」
 - ・ Zeidman LA. Hans Jacob and brain research on Hamburg "euthanasia" victims: "Awaiting further brains!" Neurology. 2017 Mar 14;88(11):1089-1094.
 - ・ Gannon M. Germany to probe Nazi-era medical science. Science. 2017 Jan 6;355(6320):13.
- 2) 731 部隊 : 隠蔽された戦争犯罪
- 3) 九大生体解剖事件: 軍事が大学に入ってきたとき
- 4) 軍事研究に対する考えが変化する :
1940~1944: 科学研究費交付金約 6 倍、日本学術振興会研究費 2.5 倍
- 5) 1966: 米軍からの資金問題; 日本物理学会、東大→外国をも含めて軍事関係者から研究援助を受けないこと(1967)
米軍から民間団体を介して増加 : 1999(1)~2009(24)
- 6) 武器輸出 3 原則の変遷
1960 年代→2014 年 第 2 次安倍内閣 見直しから防衛装備移転三原則
- 7) 2015: 安全保障技術研究推進制度の出現
- 8) 一般化理論、デュアルユース
- 9) もしこんな研究テーマが出てきたら
 - ・ 防衛省が開発した装着型 MRI を用いた BMI によるロボット、ドローンコントロールシステムの開発
 - ・ 国連平和維持活動 (PKO) 派遣隊員の帰国後自死、心的外傷後ストレス障害 (PTSD) 発症予防の研究
- 10) 私の報酬系は、安全保障の餌に我慢できるか。同志社大学の対応